

紀元千年頃の西欧社会の歴史的展開について

—— ラウール・グラベールとその著を中心にして ——

Historical Development of Western Society around 1,000 A.D.:

Raoul Glaber, a Burgundian Monk and His Writings

守山 記生*

Norio Moriyama

はじめに

筆者の年来の研究上の関心は、歴史上の平和がいかにしてたもたれたか、もし紛争があればそれはどのように解決されたかをさぐることである¹⁾。B・H・カーは、「歴史とは、現在と過去との対話である²⁾。」と述べているが筆者も紀元千年頃の西欧社会と対話して当時の政治・社会の全般的な特徴をあきらかにすることをめざしたい。紀元千年頃といえば、西欧社会は、西欧中心史観にならないように注意する必要があるが、若々しい覚醒の時代を徐々に終え、躍進の時代をむかえる³⁾。つまり、本格的な封建社会が形成される11世紀以後の西欧世界の歴史的展開の出発点として位置づけられる。このような大きな枠組みを前提として研究して行きたい。勿論、筆者は封建社会を暗黒社会とする考えは排除するが、逆にバラ色の時代であったとする説もとらない。西欧中世社会は、さまざまな局面ではかなりミゼラブルな時代と考えられるのではなかろうか。このことも、硬直した先入観があつてはならないが、筆者の研究の重要な前提である。

I 紀元千年頃の西欧社会の一般的な特徴

紀元千年頃の西欧中世社会は、地域的にみて差があるがまだ無秩序な体制をたちきれない時代でもあった。フェーデ (Fehde, guerre privée) はまだ横行していたし、それは他の時期・地域にも紛争があつたが西欧中世社会特有なものと考えたい。特に教会人や貧者 (pauperes)⁴⁾ は平和な社会生活を希求したが、その実現はかなりほど遠く、彼らは暴力の犠牲になりやすかった。989年頃に無秩序が特に横行していた南フランスのアキテーヌで教会、特に司教の音頭

とりではじまったシャルー（Charroux）教会会議では上記（注4を参照）の事項がすべてとり決められている。「神の平和」運動のはじまりである。以後、「神の平和」は保護の対象と手段を発展させて、11世紀を通じて西欧各地に伝播していく。

1020年代には、この運動はアキテーヌ地方からブルゴーニュ地方へと拡大する。ここで我々はラウル・グラベールと出会うのである。

Ⅱ 紀元千年頃の西欧社会の歴史の語り手

この章では、次章でラウル・グラベールを中心に述べることにして、紀元千年頃の西欧社会の歴史的語り手について若干みておきたい。

紀元千年頃の西欧社会とはおよそ980年から1040年までの間と考えておきたい。この間には大飢饉などがおき、当時の人々はそれを神意として恐れて生活していた。これはラウル・グラベールでもそうであったのではないだろうと思う。ここに終末思想の生じる素地があったが、これにはほとんどふれない。

ここでは、四つの歴史書の類があるが、ラウル・グラベールほどに詳しく正確だとも思われない。先ず、『編年史』（Annales）でこれは毎年におこった重要な出来事をあんで行く。例えば、フルーリー（Fleury）修道院の『フルーリー編年史』（Annales Floriacensis）があるが、1003年から1060年のうち記載されているのはこの間7年間しかのせられていない。

次に、『年代記』（Chroniques）は、例えば、『ノヴァレーズ年代記』（Chronicon Novaliciense）でここには興味深いことにサラセン人に略奪されている記事がある。この書は、紀元千年頃に再建されたノヴァレーズ修道院で1050年以前に書かれた。

『年代記』の他の重要な例として以下の二書をあげることが出来る。司教ティエトマル・ド・メルスブル（Thietmar de Mersebourg）によって『年代記』八巻は書かれた。ティエトマルは976年に生まれ、サン・ジャン・ド・マグデブル（Saint-Jean de Magdebourg）修道院で教育を受けた。このティエトマルは1003年に司祭となってその地の大司教に愛されて1009年に司教となった。ティエトマルは晩年に『年代記』を書きはじめ1008年まで書くことが出来た。

最後に、アダマル・ド・シャバンヌ（Adémar de Chabannes）はティエトマルと同じ様に、先ず修士であった。988年頃に生まれ、修士の次に司教職となり、『年代記』を書いた。

三番目に、『奇跡の書』（Livres de Miracles）も当時の人々の心性を考慮に入れれば、史料とすることが出来る。

しかし、一番最後に、正真正銘の「歴史」としては、以下の三冊ほどしかない。

先ず、サン・カンタン・アン・ヴェルマンドア（Saint-Quentin en Vermandois）の修道院会の長老ドウド（Dudo）の作で1002年まで記載されており、ノルマンディー地方関係の記事が中心である。

次に、888年から995年までが歴史的対象となっているサン・レミ・ド・ランス (Saint-Remi de Reims) の修道士リシェ (Richer) の『歴史四巻』(Quatre Livres d'Histoires) がある。最後に一番大切な史書としてラウール〔ロドゥルフス〕・グルベール (Raoul (Rodulfus) - Glaber) による『歴史五巻』(Cinq Livres d'Histoires) がある。

Ⅲ ラウール・グラベールの生涯

我々がラウール・グラベールについて知っているすべての事柄は、ラウール・グラベールが我々に伝えたいと思うこと、我々が彼の著書から推論することである。とても驚くこととして、ラウール・グラベールが加わったと思われる各修道院の数の多さである。

特定の修道院で、我々がラウール・グラベールを明確に位置づけることが出来る最古の日付は、紀元千年すこし以後である。当時、ラウール・グラベールは、偉大な修道院長エルドリック (Helderic) の下で、オーセール (Auxerre) のサン・ジェルマン (Saint-Germain) 修道院に居た。オーセールのサン・ジェルマンは、有名な伝統をもつ大きな修道院で、ラウール・グラベールの最初の公職の地であったと思われる。『第五巻』の冒頭の伝記風の強い文章で、ラウール・グラベールは我々に次のように伝える。即ち、自分は身勝手に放逸な少年であったけれども、修道士であった彼のおじはラウール・グラベールの12才の時に、断定できないが、レオム (Réome) 修道院であると考えられる修道院にラウール・グラベールをあずけた。しかし、そこでラウール・グラベールは振舞いが悪いということで、追放されるはめになった。けれども、ラウール・グラベールの文学的な才能の故に、まもなく、これも断定できないが、サン・レジェ・ド・シャンポー (Saint-Léger-de-Champceaux) 修道院に受け入れられたようである。すべての年齢の修道士たちが生活しているものとしてのこの修道院は、サン・ジェルマンのような大きな修道院であった。そこで我々は以下のことを推論することができる。即ち、ラウール・グラベールは980年頃に生まれ、990年代にオーセールのサン・ジェルマン修道院に入り、そこで騒動をおこしやすい性格にもかかわらず教育を受けた。そして1016年以前までサン・ジェルマンの支配下にあるこれも断定できないが上述したふたつの修道院にラウール・グラベールにむすびつけることが出来るのではなかろうかと思う。

『第二巻』でラウール・グラベールは、オーセールとその地方についてたくさんのことを書いている。1003年に、オーセールを攻囲中、国王ロベール⁵⁾ はエルデリックとその修道士たちにサン・ジェルマンを明け渡すことを命じている。

ラウール・グラベールが入った次の修道院は、偉大な修道院長の聖グリエルムス (962年頃-1031年) の下でディジョン (Dijon) のサン・ベニーニュ (Saint-Bénigne) 修道院である。

ラウール・グラベールは1030年頃にクリュニーにはいった。ラウール・グラベールはずうとブルゴーニュ地方で過ごした。しかし、ラウール・グラベールは聖グリエルムスのイタリア旅行に同伴した。実際に、『第四巻』の冒頭でイタリアについてのたくさんの情報がふくまれている。ラウール・グラベールの聖グリエルムスのイタリア行きにいつ伴ったかの出発の日付

について知るのはかなり困難であるとしても、いつ終わったかを示すことは比較的容易である。ラウル・グラベールは次のように我々に伝える。即ち、彼は聖グリエルムスと口論し、その修道院を去った。しかし、ラウル・グラベールは1031年に死去したその聖人を称える聖人伝である『聖グリエルムス伝』を残している。『第三巻』の終わりころで、ラウル・グラベールは、聖グリエルムスとフランス国王ロベールの間での会見について伝える。その会見は1030年に行われた。この事実は、ラウル・グラベールが、聖グリエルムスのその保護がラウル・グラベールが狭い地域の見地から物事を考えたりすることをまぬがらしてくれるイタリア行きに加わったのはこの年にちがいないことを示してくれる。

1031年から1033年までの大飢饉についてのラウル・グラベールの描写はクリューニーに近いマコン (Mâcon) とトゥルヌス (Tournus) の都市に集中している。ラウル・グラベールのクリューニーでの滞在は、クリューニー修道院長聖オディロ (Qdilo) への『歴史』の譚話を物語るが、しかし、ラウル・グラベールは長くクリューニーには滞在しなかったことになる。

クリューニーでしばらく滞在した後に、ラウル・グラベールは、オーセールのサン・ジェルマンにもどった。クリューニーからのラウル・グラベールの出立の確かな日付はわからない。しかしながら、ラウル・グラベールが1034年までかもう少し後にベーズ (Bèze) にいたことははっきりしている。1035年頃までに、ラウル・グラベールはもはやクリューニーにはいず、ベーズに住んでおり、そのしばらく後に、ラウル・グラベールはオーセールのサン・ジェルマンにもどっていた。

ラウル・グラベールはオーセールで『歴史』を完成させたと思われる。何故なら、後の箇所での修道院についてしばしば言及しているからである。ラウル・グラベールは、サン・ジェルマンを自分の本拠地の修道院として記録しているように思われる。

だが、ラウル・グラベールはオーセールにもどったように思われるけれども、ラウル・グラベールは別院に住んでいた。『第五巻』でラウル・グラベールは、オーセールの子院ムーティエル・サン・マリ (Moutiers-Saint-Maire) で起こったことを記録している。ラウル・グラベールはオーセールでの最後の居住の間その子院での短い訪問を楽しんだ。ラウル・グラベールは1046年頃に死去したことは有りそうなことなので、オーセールの住み家の期間として語られるのは妥当と思われる。

『歴史』で記録される最後の事件は、1040年代半ばにおける教皇権の混乱である。ラウル・グラベールは教皇庁についてここ25年の間腐敗していたものとして言及し、聖職売買が行われているということを付言する。ラウル・グラベールは、リヨン (Lyons) 大司教ウルリック (Ulric) の死去と1046年におけるディジョンのサン・ベニーニュの修道院長アリナール (Halinard) の継承について述べない。ラウル・グラベールの死去は、1046年かあるいは1047年に起ったのであろう。ラウル・グラベールの生涯の出来るだけ妥当なアウトラインをまとめてみると以下ようになる。

① 980年頃－誕生

- ② 990年代の早期から1010年以後のよくわからない時代まで—最初のレオム（ムーティエル・サン・ジャン）についてサン・レジェ・ド・シャンポーの居住期間をふくむオーセールのサン・ジェルマン
- ③ 多分1016年の早期から1030年頃まで—ディジョンのサン・ベニーニュ
- ④ 1030年頃から1034年あるいは1035年頃まで—クリュニー
- ⑤ 1034年—5年頃—ベーズ
- ⑥ 1036年—7年頃からラウル・グラベールの死去（1046年頃）まで—ムーティエル・サン・マリでの居住期間をふくむオーセールのサン・ジェルマン

ラウル・グラベールの3つの主要な修道院は、オーセールのサン・ジェルマンとディジョンのサン・ベニーニュ、そしてクリュニーである。そのうち、グラベールの本拠地の修道院は、サン・ジェルマンであったことは疑いない。その上、ラウル・グラベールの場合、ブルゴーニュ地方の修道院で生涯の大半を過ごしたということになる。しかし、ラウル・グラベールほどに居住地をかえている修道士も珍しいであろう。けれども、年代記作者としてのラウル・グラベールを考えてみた場合、その居住地をあちらこちらに移ったことはむしろ利点になるのではなかろうかとも思う。

Ⅳ ラウル・グラベールの著述について

—『歴史第四巻』を中心に—

ラウル・グラベールによって書かれた二大作品の時と場所の一覧をえがけば以下のようになる。結論の一部を先取りすることになるが、Ⅲの末尾にまとめたラウル・グラベールの生涯とつきあわせて考えていただきたい。

- ① 『歴史』第一巻（初版）、第二巻、第三巻（第一章、第二章）—ディジョンのサン・ベニーニュ（1030年頃以前）
- ② 『聖グリエルムス伝』—クリュニー（1031年～1034年あるいは1035年頃）
- ③ 『歴史』第三巻（第三章～第九章）、第四巻、第一巻（改訂版）—オーセールのサン・ジェルマン（1036年頃～1041年頃）
- ④ 『歴史』第五巻—オーセールのサン・ジェルマン（1045年頃～1046年）（以上、①から④までの場所はいずれも修道院である。）

以上、『歴史』は思いつくままに何らのプランもなく書き流されたのではなく、少なくとも『第四巻』までは推敲を重ねられた作品である。従来考えられてきたよりも『歴史』は、綿密に考えられた構想によっていると考えてよいのではなかろうかと思う。

最後に、ラウル・グラベールが「神の平和」運動を著述している『第四巻』について若干たち入って考えてみたいと思う。『第四巻』は上述したように、オーセールのサン・ジェルマン修道院で1036年頃から1041年頃の間書かれた。この巻には、キリストの受難千年紀を主として著述されており、飢饉の大流行、「神の平和」運動、エルサレムへの巡礼の盛行など興味

深いテーマが書かれている。

ラウル・グラベールは「神の平和」運動をどのようにみているのであろうか。以下略述する。冷害や洪水の為にヨーロッパ各地を襲った大飢饉 *penuria* がしばしの豊饒に取ってかわったキリストの受難千年紀（ラウル・グラベールの紀年法では紀元1033年）頃を、盛行をみた「神の平和」運動の起点・原因としていることが注目される。この時、司教らによって平和を回復する為に行われた会議や告示集会には、権力者の掠奪にも増してこれ迄の災害に恐怖を感じる大群衆 (*tota multitudo universae plebis*) がつめかけたという。Cowdreyは以後ナルボンヌ教会会議（1054年）まで続く一つのパターンに注目している。即ち、戦争・掠奪に加え、グラベールの指摘する飢饉に続いた流行病 *ignis sacer* の打撃は、当時の人々にこれらのすべてを神罰と感じさせ、神罰からの救済として平和を求めさせた。この過程で平和教会会議での聖者崇拜や聖遺物の動坐が促進され、流行病→治療→平和の協定に至るパターンが成立したという⁶¹。また、ラウル・グラベールが「神の平和」で最も重要な規定として注目している「犯してはならない平和を守る」(*inviolabile pace conservanda*) ということを主張している。このこともあって、ラウル・グラベールの「神の平和」運動に対するかなりの好意的な理解が察しられるのではないかと思う。そして、紀元千年頃のヨーロッパ各地の人々の思考法や世相等を考えてみるのにも当時の歴史書として文献が数少ないこともあってラウル・グラベールの著述を再考してみる必要がある。

おわりにかえて

ラウル・グラベールの歴史書としての価値の再検討に火ぶたを切ったのは、西欧中世史の研究の権威G・デュビイ (Duby) であった。最後にデュビイの言葉を借りておわりにかえたい。

「もうひとりの修道士、不従順で一貫性のない、ラウル・グラベールといわれるラウルは、ブルゴーニュ地方のいろいろな修道院を転々として、さまざまな欠点があるにも拘らず、彼の文学的な才能の故に貴重がられた。ディジョンのサン・ベニーニュ (修道院) ではラウル・グラベールに歴史を書くようにすすめた……〈省略一筆者〉……。ラウル・グラベールは1048年頃、クリューニーで『歴史五巻』を書きあげたようである (断定的ではないが、その作成年代、作成が完了した場所等を再考する必要があると思う一筆者)。これは10世紀はじめ以後の世界史 (*une histoire du monde*) で、修道院長オティロ (Odilon) に献呈された。ラウル・グラベールの評判はよくない。ラウル・グラベールはおしゃべりで、だまされやすく、不器用といわれ、ラウル・グラベールのラテン語は冗長だとみなされている。しかし、ラウル・グラベールの作品を、我々の精神態度や我々の論理で判断してはならない。ラウル・グラベールの精神の歩みに上手に歩調を合わせようとしたら、すぐにラウル・グラベールが当代で最もよい、いやそれ以上の証人であることがわかる⁷¹。」

(この小論は、2003年度奈良大学研究助成を受けた研究成果の一部である。)

(注)

- 1) 古今東西で紛争が絶えた日はなく、空間的、時代的に重要な紛争については、出来るだけ共同研究が必要であろう。服部良久氏は次のように論じる。「近年、洋の東西、時期を問わず、社会における暴力や紛争と紛争解決のありかたに対する歴史研究者の関心が高まっている。」(同上、「中・近世ティロル農村社会における紛争・紛争解決と共同体」『京都大学文学部研究紀要』第41号、2002年)
- 2) E. H. Carr, *What is History?*, 1990.
- 3) 古い文献だが、Maurice Lombard, *Hahomet et Charlemagne, Le problème économique, Annales, Economies, Sociétés, Civilisations*.
- 4) 「神の平和」運動(「神の平和」運動については直後に述べる)でも教会人以外で相当につかわれるこの用語は、農・手工業者などを総括的に述べる重要なタームである。教会人などを除けば、おしなべて民衆はpauperesだったことに留意する必要がある。もともと、フェーデは貴族・騎士の一門同士(従って平和誓約を行うのも彼らの階級が中心)で行われたのを主とするが、教会への侵入者、農民agricolaeその他の貧者pauperesの家畜を掠奪する者、非武装の聖戦者を攻撃する者たちが対象となった。刑罰は破門anathemaである。
- 5) 国王ロベール敬虔王については、労作として、江川温著、「ロベール2世の王権と『神の平和』運動—1020年代初のブルゴーニュと北フランス—」(関西中世研究会編『西洋中世の秩序と多元性』所収。)古典として、C.Pfister, *Études sur le règne de Robert le Pieux (996—1031)*。最近の書として、L. Theis, *Robert le Pieux, Le roi de l'an mil*。(上記、洋書にはどちらもラウール・グラベールについての記述がある)。また、*Le roi de l'an Mil, textes et documents sur Robert le Pieux, traduite du latin par M.Guizot et R. Fougère*, 2001年もある。なお、紀元千年の有名な教皇ジェルベールについては、P. Riché, *Gerbert d'Aurillac, Le pape de l'an mil*, 1987。
- 6) H. E. J. Cowdrey, *The Peace and the Truce of Good in the 11th century, Past and Present*.
- 7) *L' An Mil, Présenté par Georges Duby*, Éditions Gallimard, 1980, P.21, (ジョルジュ・デュビイ著、若杉泰子訳、「紀元千年」)。

〔文献〕

特に重要な参考文献、本文の注記と重なっている場合がある。

- ① Rodolfus Glaber, *Opera*, eds. John France, Neithard Bulst and Paul Reynolds, Oxford, 2002.
- ② *Chronique de l'an Mil, Écrite vers 1047 par Raoul Glaber, Moine bourguignon, et traduite du latin par François Guizot*, 2002.
- ③ *L' An Mil, présenté par Georges Duby*, 1980 (ジョルジュ・デュビイ著、若杉泰子訳、「紀元千年」)。
- ④ H. E. J. Cowdrey, *The Peace and the Truce of God in the 11th century, Past and Present* 46, 1970.
- ⑤ 拙稿、「北フランス・ベルギー中世都市研究」1995年。
- ⑥ 神崎忠昭著、「千年目の年に—ロドルフス・グラベルの『歴史五巻』にみる終末思想—」(歴史学研究会編、『再生する終末思想』) 2000年。